石上私淑言

上

へ 4
55
1

へ 4
55
1

本居宣長大人著

藤原彦麻呂校正

石上私淑言

江戸
書肆千鍾房

石上私淑言序

四条大納言の新撰髄脳俊頼の無名の世
々おほかたは清輔は古の髄脳の
ためにつくれる抄とて歌のさまはさらにもいはく
うたと歌よみの心ばへのしるしさへ書きのこしく
なきは少なからずある書は今よりさきざきの
をみそこなふ伊勢の國なる本居の
翁は物よみのみなりける人のかの
まさしくあるべき事の事をさとめてのやうに

秘 55 閣 1 巻

業はしるされたる書あまた有となん松洲か
と私に行なふるえハ歌のこゝろのことはみつのハらと
まよひぬ雅くれハの代々意のことのまよく
古今の親ならんやとよく人のひとよく雅しあら
や宗祖以後やおほえの人なすきもちのあめ
うれをとるしくハ何くつらむまうなれとなか
くる涙ハ世にかくてもの雅年とるかくさらの
年さきひのやうなかれつらまうたちき人後の世
然あのしとをたまぬ魚まハ何それ以文人し教を

翁のちつよく示めてなをいはまんけとさらに一の雅
なる人ハされんとよおほえとゝハいのよめるハやむへ
きしのもと一世のうちよいつくそされ書とも
東邑黒やうに津守ともあまたぬへくは抄覚への
うとそへの手ちよみたゝとまらてとわけてよみ
寿ヘら丹しいはと人ハ家友あしのはか庵
のあるし洲緑意ハ専らのぬし也けり抄楽書の
名とせる人この語ハふることのおやなるちるす
読ませしめく出て松洲の文字ハ分しかえ人

の諾せる盃子とゝてよみちゝへ字とな拜

文化十二年七月

岸本由豆流

神風乃伊勢の海の礒によるてふ小貝を
元の老翁か学ひきし翁の学力をもちら
は梅ノ宮はしめに河ある松をかきつけたるに
とゝもにかく記ありしを今に中小縁河く
家ちかく諸人へとゝし亀山みちある跡しハ
石山私淵にありしいつそこは書かきて
とゝめ天わの紀歌よみたらふありしかさ
よもと村肝の心をしてうたよみはしめ
末亀川ゝ歳よく残すめるを見てなく

柿本ならで世にもいそし侍りては石見人のや
須田村殿の浦なる翁数里人とりいかなく
無婿のこゝやさればさらに数寄しの係屋
にこの案内をなあるしにしそ侍るなしかの
老翁の前の道とゝこえて物語志るすぐる
耶何年ゝ見れをゝ数なるはかくにほのかに
翁く和歌の事とをのひとせ二男のかと
よのそあるとゝ云れ趣きてたくさんの詩を
為翁のことなる小語しるにいはれくいさゝき

心志りまゐを度本ありのひゆるるゝ也はさつゝの
翁数の歌れかと数とあひ事とみ侍く思の
家の事亀にまにつゐ伝てゝ是乃方は出
学とて何学けるにかしに数ゐ得多絶と
案の亀業しゝ森のほとけの侍るし
我くこ心ゝつい亀りもの和くへ小ちこゝと
ちらひ八千度もてまくかしと侍りとも
もて秀ち海なる数章をも案なてはし也
和歌しつゐてし侍世乃為にす文紀か

寛政十二年さつき月上の十日やまと
ことのはにあらはしゝ画ひらきまとひろの
ことし大平紀あけ行なんみやこ川
の濱邊にて書るを翁の田能清
藤原常彦書

石上私淑言序

いでや今は御学ハいにしへ学びまさりにさかりゆきて
漢ふみの説どもおほくつ説あきらむる人も佛の教へ
をならふとも法師もかつゝ我大御国の御ふみどもをか
がひまつることゝなりぬるハいとめでたくよろこばし
きこえあるぞや　さる後世の歌よむ人もいにしへ学びハ
まだ知るまじくのこゝろえるにぞ思ひさけて歌といふことも
よむといふ言のこゝろをも弁へぞ難きもののくちを
まりぬるたけをいひつらしていへる世のかぎり知後

やれるハちぢなきことぞりしさてに家本居翁ハいは
志人は学びにまくして世のたゞみにいさをあること
ハおのれ言あげせねども天の下に誰ハ知らざらむ
そがうへに歌よむ道ハさへ人にまさりて其歌と
いふことをよむといふ言は古を始め歌のうへにえう
ある節どもを出あつめて石上私淑言と号け
られたるを今は藤垣内大人が見おかれし跡かり
得てうつしいと嬉しくて歌よむといふ言
のことをよびに志らざりしてそれゆゑ歌よみの上はこ

まる人には見せで徹の歌は世意よし志らせまほし
くらぶび其道にいりて本にあらせつるにたゞ
さるハもとより物しらず物し給ひしくへにたとこ
なるなどとは志りながら我のが思ひよりたることをもさ
はゞかる人あるに今の大人にかさらりゆしておのれ
さりし所が物せるつゝさりどころなかりければ
せむ世はしめすれバ見出し給ふべくやちゝかき学
ハふるき写し巻られけるぞ○得てうつし
くさしよ異にうつくし故いさゝか言葉して梓に志る

以てやこれ二元集このいつ吹なのせる小角のひきさら
のするつらねおさまききての物ゆたえのせられ来たるめて
孫なのひきさりけるもの志花なる物の心ゆへまるかきなる
かくのせられたるきゝ集をさまりにさせまかりゆ
きておのゝ志てんの地九一の経あるかなよ月にあられ
あつし事にぬるまあそらひくらしまて物あいの事
ての世にいるもまうしるる大濵世の家ゆこゝよ
上しあ親之これにつらぬ志をへつゝ出くゆものゝ以
やなゆにこゝちかるれぬまでおのえのここちくる
とやてもせんかしきゝひとくしいてきぬ道さとこと
此りにかの社をくる志のあれ之物まなふたちにもい
たくめる人言よむ物さにきてられぬる人筆つにおき

せてむつましき名をまとむる人々もあれぞそれが中
むかしなつかしいひろさせる人もあるべければこゝにあつ
ぬるまでなりとめさがしてまいらせし　物くも
あつめに家僕翁の物せられし事をもしるし　句
なればおのれそしりはもいさゝかあるべくやかく
いふは武蔵国深川の江戸の館に住らうまつる
芦孫かり庵乃あるじ

藤原斉麻呂

醫の志しのともがらハ林にしげき本草のめぐみの
いやしさをもいなみにいへるをそれそれのすゞハみなみなし
世々のおほくのくわしくハあきらかにして其のちの世
ならひよろしき文ハ後の世のためなりけるこゝろ
そのむかし志をたてゝ此契の質なるさちのやから
志るになれゐるものハ京よりの人いふ京よりさる
それとかゝるものおほからいおなじ葉なるあるハ京よみ
如ら志く醫のみちすぢあつてこのてあまりも古
さよのまなびひとすぢあるハ古よりの京なるひとの
えらめるも京なるのみちうらゐ人よりまのくつきのむかし
に流るゝのなりとといひおきてゆるぐこれも是又
為しとおほゆるをよみ一の矢くかゝはる事を承

これ又一つれ又うちあひておこなはるゝうへこともなく花
それとおなじゆゑにて今も眞珠庵の何関某と縣居の
翁になずらへおそしなるゝは世にわれあるものゝひとつ
いまハ京と江戸との相きよらむとぞしられあたら
ひかぎるにこそ志ちりて居るといふ者の見ハおよそらさ
あまよふるに文鈴屋の本居のみちなむおそしらるゝば
先翁ハ縣居の翁のみいさ手ていはゆる契ての如
美らとなおきらぬそれしかまへハ皆によりあ一つの
何ての世のえなむら如屋に人あまたあるましき
まゝになむおそしらるゝころ世間に人の忘るゝところ
なれど文にことかゝぬえなうひたくしさていま此書
をしれはすなちのおそしよるとのまつれ居るまて

ちかごろもろこしよりわたりしふみにみえてそのまゝ
なひきむ人のためにもとめつあることゝもを人々の
とりてまのせてゑがく所かれたるこの法をさなきともの
のこりしをあつめたるをいかほどとてもまなびえて
ちかごろ私淑とおなじく所作さるる
さかくてこの好みいまの世にあまねくきこゆるひと
なかきをおのがともあつめてみずからうつしを
むかし又画伝のぬしてみなくにれなしく芥子羽
身まかりて後人は手をもて所かたれるその
としの頃ほひ京にわたりの坊はつひのまなびたる、
てならひやうのおもしろくえらそのよ
まてとゝめしかもかれをもてまなびたる

このえんのおもてにはあらねとも、あてぞあるは
きまへて画なりとおもいまして山水花樹に通じて
世にあまたかなりとおもふ絵とすることのもとならひと
しやうのみなもとしてたてまつるおのれおもひつけ
ぬすみしともまへかおもひといわれてま
さしきりの所のやうまてとくあれといやし
のなかなひのおもしろやうておのの画ならへまたおもや
なまめかしいふてこの心なるを画きてよろこひつれは
ら東ひまてたなかえちを筆をとりてこゝにかつくるは
みぬしのこゝろとおもふるのぬしのまなびをまねぶ
なする芥子園のあるじ　片岡寛光かく

石上私淑言上巻

本居宣長

あるひとゝひていはく歌とはいかなる物をいふぞやまろこたへていはくひろくいへば卅一字の哥のたぐひを始として神樂哥催馬樂連哥今様風俗平家物語猿樂のうたひ物今の世の狂哥俳諧小哥淨瑠璃わらべのうたふはやりうたうすひきうたのたぐひを詞の程よくとゝのひあやありてうたふ物ハみな哥なるべしこの中に古今雅俗のけぢめハあれどもこと〳〵く哥にあらずといふことなしされど今あやしきしづの女がくちずさびにうたふ物をも哥といふ是則まことの哥也かの卅一字の哥のたぐひハむかしの人の哥なり小哥はやり哥のたぐひハ今の人のうたふ哥也これをなべて哥ふしして

さまなるにことなるは古今のけぢめ也むかしの歌は詞もうるはしく
みやびやかにてめでたく今の世の歌は詞もいやしく
きこゆるさまは雅俗のけぢめ也かくのごとくさまは古今雅俗のちがひあれど
あるうへにくらべて同じ歌といへどもあしきねぢけたるもよく歌にわかれど
いふ事なしこのむねをかへすがへすのたぐひよくよくわきまへて別前
いにしへより是神代より今にいたるまであひつゞきておのづからそれ
名義をも失はぬをもつて歌のさまは今も詞を世々にうつりかはれ
どもさまをもむかしのまゝなれば神代の歌も今の歌もひとつに
してかはる事なし然るに歌といふべし人の心もひとつにて禽
獣にいたるまで有情のものはみな其声あるは古今集の序に
花になく鶯水にすむ蛙の声をきけばいきとしいけるものいづ
れか歌をよまざりけるといへるをみるべし鳥虫などの鳴く声の程
よくそのひておのづからあやあるはこれ歌となるを鶯蛙の歌とて世
一家の歌と伝へたるは古今の序の詞によりて好事の者の作りなせる也
禽獣はつねに人の歌をよむことあらむ鶯は鶯蛙は蛙おのがさまに鳴
声のあやなるをきゝて歌とはいふべきさまにて此世にいきとしいける物は
これおの〳〵歌あるべし或説には歌は天地のひらけしはじめより
万の物におのづからある理にて風の音水のひゞきにいたるまでこと
ごとく声ある物はこれ歌なりといへるは事広く深く聞えて歌の心をえたると
よろしくいへるに似たれどもあやまりて深き説也その故は歌といふ物は程

彦麻呂云古今集真字序ニ若夫春鶯之囀花中秋蟬之吟樹上雖無曲折各発歌謡物皆有之自然之理也云々とあるハ実ニ曲折なきを云ふハあらぬ人のうたふにむかへてハ曲折なきやうなれど文字にあらハしてまつりて曲折ある物なり

らくそのひてあやなるをいふことなれバ青丹の詞をすべて歌といふにハあら
ざる也其詞のあやなるを歌といふ事文人の詞もあやなるをハ
といふべきにハあらずたゞ其の詞のかく歌ハ心に情の物のあまりて非情
の物にも歌ある事なりこの故に古今序にもいはれたる也此中
こそいつもよろづの物とハいへどバ序にも古今序にも物皆有之とあ
るも生物といへるなれバ万物の声をいふとハいはず妄
物ハそれ情なくてうたふ声をいはずなれバ其情ある
声別なる非情の物もうたふ事を出せる事なし所謂なれて声
あるも歌ハ情ありていづるもの也されバ非情の物に歌あるべきことなし
さればハ金石絲竹の声もみな物の音にて歌とハいはず是情なくてうたふ

うち出る詞にあやなきおのづからなれバ風の音水の響きハいかでか歌といはむ
たとひあやありても非情の物の声ハ歌とハいはれまじまして あや
といふべきことなし　問云詞のほどよくそのひてあやなるを
いふなるを　答云うたふ詞の文辞なくてうたといふ
く声のあやなるとハ詞のよくととのひてうたはれ好事也大方の言
七五などそのひるが古今雅俗よそかて程よき也さればむかしより歌も
今の世の小歌もみな五言七言也是自然の妙也上代の歌ハ文字の数
定まらずといへるハ謬也神代の歌といへども五言と七言とをもつて
其中にまじへるハ三言四言文ハ三言四言または七言と云二言八言にあまる事も
あれどもそれもみなうたふ時にハたらざるをバ節をひくしてそれを

足しあまれるをば第をつゞめそみじかくうたひてみな五七五の調にかなへて
うたふことあれバ三言四言六言八言もうたふ所ハみな五言と七言の調に行を
ことぞ是をもて知るといへど今の世に四季の端うたやはやりうたもつぎつぎさかりの
うたをきくにみな五言と七言とを本にあつまるとたとへぬともおのづから長短を
ものべあはせて五言七言の調にかなへるにてあるをさけバみな五七の調を
是自然の妙にして神代も今も異なる事なし猶古今序の小注に
下照姫の歌と文字の数も定まらず歌の様にもあらぬと見えたるハこの
ことわりをしらずして日本紀にのせける所どもそ猶の世にいたつて
いつしか神代の歌もみな程よくそのひておやさしき五七の調にかなはざる
なしかの下照姫の歌ハ殊に其調程よくそのひてうるはしくきこえ

なりとしるハ文字の数定まらざれバうたふにはその調とゝのはざれて
耳にさハりて定まらぬ也今の世の少年のたはぶれも文字しらぬ人も
よくしれる事也上代の歌ハうたふ時に耳にかなふやうにうたひて調とゝのへバ
三言にもあまり四言六言八言にもあまれど五言七言の調にかなへるとこそ
字のたらぬとあまるとハかくはからずしてこれにもあまりてもよき所なら
でもよき所あまりてハあしき所もあるにてハあしき所あるべし此故うたふ
時にしるしき事を程よく五言七言にそのうた事ハたしかにいふべし調の
程よくそのひおやさしきとハかくの如きそのうた禽獣のなくこゑも是に
おなじくて知るべし五言七言ハ人の調の程よきことなる此故をおもふに
まれの程よきものをとりてそれが所その物の声也　阿云まへに

いへる平家物語今の浄瑠璃のさびハなにハあらじと物の本にいへに
蓋云こゝろハもとゝ物語のさびなれた節をつけてうたふ本ハなる之物語
のさびハかやうにうなづき物中にわらねども平家物語に少し流行く
うたふ事始りてより後代の謡物浄瑠璃のさび出来たる人乃
出来を語と文との字ちがひて文ハうたふ事なき物なるとちがひ世り
なりてハ文の作なる物なとうたふ物なるとこの此方にても物語のさびハ
文之うたふづき物中にわらじ成と文とハ手何も異なる事なし
ことなることなる物なるを文の詞をもうたふ事になりぬるハ末の代に
まざなるべし されたるを是を語るくらべ写やうにつなてうたふ平を
ならへたゞし平家ハうたふとハいひそ浄瑠璃といふ是をうたふべき物なり

わらじ物語のさびなる故にまんぞくとありていへる名目なるべし
名を傳へられた実ハうたふことの故にこゝろしとも是がなのたぐひ
となるべし　又問云此等ハ何ゆゑより始りたるぞ　答云古今の序に
此歌あめつちの別け始りける時より出来にけりといへるを　餘材
抄に註して　神代紀云開闢之初洲壌浮漂譬猶游魚之浮水上也
このゆゑといへるなりわらじ古語拾遺云一聞夫開闢之初伊弉諾伊弉
冊二神共爲夫婦生大八洲國及山川草木云々 以上餘材抄文 とありてある
説に天地開闢の始より歌の理をなつるをいはずして浄瑠璃の理を
さるべくいへるハ天地の別けそめしより歌ありそくといへる浮て
うなづきとなる説なしくことごとく二神の御ことも開闢のそれなれや

万葉第三赤人富士長哥に天地之分時従といひ又第二人麿呂長哥に天地之初時之云々天照日女命天乎波所知食登とのひ第十に乾坤之初時従天漢射向居而

続草庵集に
きこゆる天のいはと
ちかひまもれと今も
神代のたえぬあかれそ

いふ事と云ぬ應じかりて餘材抄に古語拾遺を引て二神の御事
開闢此ちゞわといへる事と云へるせるかもの所に云のはなしていできたるなりハ
伊弉諾伊弉冊二神磤馭盧島に天降て共為夫婦とて天之
御柱をめぐりてあふところに唱へ給へる辞といひて其詞を古事記云伊邪
那岐命先言阿那邇夜志愛袁登賣袁後妹伊邪那美命言阿
那邇夜志愛袁登古袁とあるはこのくのことをいへる御詞のことハ神代
紀に妍哉可愛少男歟妍哉此云阿那而恵夜可愛此云哀とありて
まなくし古事記ハ古語のまゝを假字にてかき神代紀ハ文字に譯
してその義をあらはされたる也妍ハ字書に藂也とも好也とも註し
たりさればあなかしこびおしへる佳偶をよろこび給へる御辞としたがひて解くハ

伊勢物語に云
おにやゝひとくちにくひてけりあなやといひけれど神なるさわぎにえきかざりけり

万葉第八長哥に櫻花能丹穂日波母安奈何と訓られとといへりアナニヤしもよし何ハ荷之又一本爾に作て巻七 すゝも何字を二ところにあるとあり

武烈紀継体紀継体紀の哥にも誰人と云ふを陀黎耶始比登ととかけり

万葉第四に吾背子夫思恵

阿那ハ古語拾遺に古語事之甚切皆称阿那とあり 此事齋部の紀にもかいせられと
頌を書りハ訓そ 万葉にも痛と書りあなとひしめきらるゝのあなにと同じ
あまぐく阿那阿夜阿々あなかしこみ歎する詞也迩夜志ハ和名にあらぬ
詞なれども神代紀に妍哉と書られバ其語を字中に迩をいふが言
ふして夜志ハ助辞也波斯祁夜斯などのやしに同じ又神代紀なる
而恵夜とあるをも恵夜ハ助辞也同じ妍哉を神武天皇紀なる此
云鞅奈珥夜とあればハ恵も助辞なる事をあらはしつ余志恵夜志
といふも恵夜志ハ助辞にてたゞ余志といふことも万葉第五に古飛斯宜
志恵夜とよみ天智天皇紀の童謡に若しを倶流之衛とあることも
らと同じ事也愛袁登古ハをさなくとよかにて同じ神代紀に善哉

春麻呂云古今集
今こそあれ我も
むかしハ男山さか
ゆく時もありこし
ものを

善少男とよみけるを須美能愛日古を比愛とよみたがひたれ
をえどもいへる事多し古事記の愛ハ仮字にて音をとるゆゑなく字を
定めし神代紀の可愛ハ文字の義をとられ混ぜざれバ又上の恵と
この愛とハ義も音も別にて是又混ずる事なし袁登古ハ少男袁
登賣ハ少女にてともに少壮をいふにて末代に老少をえらバず於登古
といふも義も音もたがへりさて下の袁ハ助辞にて今の世にてにをはの
袁のことにてあれバ上代のおほくの詞の下に袁をおける事多し迦賀
那倍弖用迩波許々能用比迩波登袁加袁の袁淤富佐迦迩阿布夜（並而夜者九夜日者十日　大坂遇）
袁登賣袁美知斗閇婆云々の袁などひ万葉にも多しされバ助辞（少女　道問者）
あらうちに余とひよあるも袁登古余袁登賣余といへるもあやうの詞也

さればこそ神代紀にハ少男歟又少男乎とよめり歟乎ハ共にハ加とよむべし
又ハ夜とよみても疑辞なれども字書に語末之辞とも註し語之餘
辭とも註したれバ今の袁といへるにあたれバ神代紀にも古事記のご
とくよむべしさてこの詞ハ古事記日本紀ともにあるといひてハ又日本紀ハ
奇なれバ仮字にてかゝるにこれハ漢文にかけるをひとしく漢文にかけるを
なほもやうにおもといひつべきの事なきあらバ或云二句にとどめのひ
て其詞のやうもまぐの詞にあらバこの故に唱といひ和といふこれ此の詞に
あらざる故なされバこの唱和をもて歌の始とする事いふまでもなき
を始ハ遠くのやうによらずしてあらぬ物也　同云此唱和の辞ハ日本
紀の神代巻に憙哉遇可美少男焉憙哉遇可美少女焉とあるを

頼らずして古事記を読るハいかに　答云日本紀ハもはら漢文をかざりてうるはしからむとかけるなれバ古語にかなはざる文章を主としてかけるが多し古事記ハ文章にかゝはらず古語を主としてかける趣なるに末の代にいたるまで文章にかゝはらぬきすがたにのこりて古語を考る事なしかの書紀にいたりて日本紀をのみ用ひて古事記あることをしらず志らざるありて古語ハ日にうとくなりゆきし也古き詞ハおほかたく文字ハまなびてをもらずとあり其事も今この憙哉といふ言も文字をかりたれバ今まありハ少男といふとも詞ハ考ふべきものなりしまた書紀ハ文字のうへにつけたる訓ハ後の人のよみなれバたがへる訓こと多しされバ憙哉の古語をうしなひてあるなど少男此云烏等孤と注し神武天皇紀に可美を于麻斯(ウマシ)と訓じたる事あれバ可美少男をハ宇麻志烏(ウマシヲ)等孤(トコ)とも訓つべし憙哉ハあなうれしとおもひてよまバ古事記と一書とを據にて阿那迩夜志(アナニヤシ)とよむべし又ハ阿那而恵夜(アナニエヤ)などよむべし書紀ハ妍哉をあなにやしと訓じたるハ此憙哉のことにて美哉ともかくべし又可愛を哀(エ)と訓じたるも哀の可美後の善の字ともかくべければこゝも憙哉遇可美(アナニエヤエ)少男焉(ヲトコヲ)とよむべきなり遇の字ハまで義理をもて書る字にて古語のあるまじくや今の世にかくあやまれるやうまりとさとるにおもひぬとまでいはん唱和の詞をも字のまゝにてくにさぐりがたければ古事記のあきらかなる古語をとらずして徒に日本紀の文字にかゝはりてその義理を解きつゞきるまじきことなり何ごとも古事記をもて文とし日本紀を注解としてよる

づき〳〵きにいへる詞に言の葉を及ぼさで八雲立をむねとして考ふべきなり
されバ古事紀ハ文ことびとおほくやまとことばにて書かるゝは道にこゝろざさむ人ハ
あけくれよみてあぢはふべきふみなり　又問て云古事記をよむべしといへるその始に
いはゆ　答て云古事紀中も日本紀中も出雲をいづもとよみたるためしなければさら
なれどといへども二紀に据て記せる歌八つの八雲の約言といふべし古事
記曰作須賀宮之時自其地雲立騰爾作御歌其歌曰夜久毛多都（ヤクモタツ）
伊豆毛夜幣賀岐都麻碁微尓夜幣賀岐都久流曾能夜幣賀岐（イヅモヤヘガキツマゴミニヤヘガキツクルソノヤヘガキ）
袁（ヲ）これ日本紀にハ菟麻語昧尓（ツマゴメニ）とあり微（ミ）と昧（メ）と一字異なるのみ此
いふのゝ意を解くに古来さまぐの附会の説多しそのなかにもきこゆるもありて
さらに叙することなし必彩絵にまよふべからず餘材抄云八雲とは八ハ数の
多くさまにいへば八重垣之八重籬八重山吹など必八重なる物ど多くかさなれ
るをいひなれつらずれし出雲とハ国の名なれば此語なりなりて得まつけたる歌
なるべければ此村ハまさにいづもの枕詞に八雲立とのたまへるなれば必の
八雲立といふことハいづるといふ意にのたまへる詞也とあるべし宣長按ずるに夜久
毛多都ハその縁語の也のりを見給ひて須賀宮とよみたまひし詞也伊豆毛（イツモ）八
風土記にも此国名のよしをあげて国の名を定めたまふよしかかれたれど実ハ国の名を
よみ給ひつるよりことばを広くのべたるものにて伊豆毛（イツモ）を国名とし八雲立を枕詞し
たまへるなりいづるまでの八穂蓼乎穂積摩蘇餓豫蘇餓（ヤホタデヲホヅミマソガヨソガ）などの例によりてのべたるべし
夜幣賀岐（ヤヘガキ）ハ弥重垣之これハ須賀宮の実の垣をさしのたまふなれど[illegible]
垣といひなす詞之やうにもさらといふべしそれといへるハ見浅し詞なるを

前漢書天文志云
陣雲如立垣
彦磨云垣ハ堺トスヘキ
カギリノ隔ヲ云之大和
物語ニ呉竹ノヨヲカキヲ
キリテカギリテ云ミト
アリ垣ハ限ノ義之
續日本後紀第十九
興福寺法師長歌
歌語尓詠反志天
とある反といふも
うらめのハなへ反して
再うたふ事多き
憲の類也

のこまつるといへも八重がきとハ所をのこる所と垣といひなし給ふ詞也そ
いづる雲も八重がきと都麻碁微尓夜幣賀岐都久流とハ今いふ妻と共
に住べき料に雲も八重がきをつくるといふ也住つる雲の垣つくりてむことゝい
ふごとき心人あるべしさるは実に造る所にあらず立のぼる雲をさして八重がき
を造るといひなし給ふ意は雲青八ちゝなりかて妻をへだつるは垣にたとへ
後の世も同じかぞへて天雲也其既立ながら人の出る雲をいふなれども須賀宮
の牆めぐりとみるは遙之たゞ雲のなりと曾能夜幣賀岐平といひかさねていへ
るも三代の歌に多かる事遙なりは今の世にも事歌のにひさびも同じなる事
有て上の詞をかへして再いふ事あはれ是歌謡の首句乃事や多く人の歌に
同じなりとまのの哀ハ此二神の唱和の留りの哀と同じことの須賀

宮を造る所にありければ立のぼる雲をさしてかく八重がきとよみなして給ふと
給ふる歌は八重垣で妻をよみ給へる也　同云古今序に此はあめ
なるハ下照姫にはじまるといへるは今八雲神詠をはじめとせるを
いふに　若云歌の心できたる時をさして八雲の御詠もこ此序乃
詞を歌の起源をかくさして天地の開闢なくいへる天上にてよめる
歌ハ下照姫の歌に始まるといへるなど古事記日本紀とする八重垣
歌は歌をなしたるよしなれば其を始とはいへ古事記にも八
雲の御歌の次に八千矛神の長歌二首治河日賣の長歌須勢理
毘賣の長歌などありて皆かの下照姫の歌は此後なれば始とはいへ
ふるひ序などハ文章でやさしくてむかしに天地を對しく

いふむねそかくハいひけることなりさてよめる歌ハ此下照姫のが夷曲とたし
かにいへる事也けるにや古文に世に傳はれるとへるもいふべし夫よりて
よめる歌とそ見ゆる也へのきこえにて哥ハ是が始也といふへき説なれど
又よめる歌といふハこの阿米那流夜(アメナルヤ)の歌と同時の阿磨佐箇屡避(アマサカルヒ)
奈莬謎迺(ナツメノ)といへる歌と二首の所ハいはえぬ又此歌をよくよく見れバ
るもさだかならず此歌ハ古事記にてハ全く天上にてのうたにあるを
此事なくもあるを日本紀にハ將柩上去而於天作喪屋殯哭之といひ
登天弔喪とあれども下照姫の天へ登りて此歌よめりしといへるハきこえず
從者八喪會者歌之曰或云味耜高彦根神之妹下照姫欲令衆人知
映丘谷者是味耜高彦根神故歌之曰とあれバ下照姫の歌といふハ紀中に

一説なるを今一首の歌をも同時によせたるを別の事とめて書しにいへるぞ
かまへし日本紀ハ事ぶりもあれバただ古事記のさだかなるにはおとるべし古事
紀にてハ此時の事をよくわかれて此歌ハ天上のうたにもあるを從者と
高比賣命とあり下照姫の別名也今一首も阿磨佐箇屡(アマサカル)の歌ハいは
えぬべく古事記日本紀ともに見ひて古事記ハさだかにわかれたる人をも
歌とめしたるハ古今の序にもただ一首を神代紀よりつきて此歌を天よりて
よめる姫とせられたるまさに此うた歌を序にハ文字を謝してめで
さるへきをそそ書つけをりてけるなれバ思ひてゐる實の説にハあるべ
かりけれバ此きたる紀ともかきて思ふべしまづ世に傳はれる歌の始とハ
雲の神御と思ふべし下照姫のハ後なるべし　同三十一字の歌ハ八雲

旋頭と短歌とし長歌ハ中世頃のこと短歌とまぎらはしき　答云　短歌ハ雑体
混本旋頭などいふハ漢ざまにつけたる名目也　神代よりありてふのものから五七
なりければたゞ長短といひてハ中々混本が歌の体にそのまゝハ叶はで五七五乃
調ととのへる句の数にハかかはらで思ふ心のまゝをいひつゞくるゆゑよく
ようしなれて是ハ長歌ぞ是ハ雑体などゝいふことハなかりしされバ別に
長歌の短歌といふ事ハなきことゝなりぬたゞし後世の名目とかくいひても短歌と
てにをはけくいへど廿ことにハ事ハ八雲の混本たり長歌の体ハ古記に
ある八千矛神と沼河比賣とよみかはし給へるなど旋頭歌混本歌ハ
神代に見えず神武天皇の御時に見えたる三句の歌四句にハ見えたり
されどもまさしく旋頭混本といふ名ハなし其後三句四句の歌もあれ共

猶まさしく旋頭歌の五七七五七七ととのへるは雄略
天皇紀の歌にあたらしき（惜）ゐなべのたくみ（猪名部之工）かけし（掛）すみなは（墨縄）しがなけば（爾之亡者）たれ（誰）かかけむよ（掛）あたらすみなは
うけむよあたらしき（惜）すみなは（墨縄）と見えたり混本歌ハ古事記仁徳天皇の御歌に
めどり（女鳥）のわがおほきみ（吾大王）のおろすはた（織機）たが（誰）たね（為）ろかも（歟）みおすひがねとあるこれも
おのづからかくそのひとつありそれを旋頭とするはわろし一字二字
あまりぬるハ又ハ五言七言のまじれるたぐひなどハいくらもあればなべて
是を始といふべきにハあらねどなまじくその後の雑体の同じ歌の始なく
みえたるをあぐるなりたゞ上古の歌ハ三句にあしく句数はいろいろと定まらず
ありけるを後に短歌と云ふ雑歌といふ事はきまへてなきなり　問云人の世となりて
まさしくは何の御代のいつごろより三十一字にハさだまれると古今序に云へるは

いつはるすぞ地神五代をバ人の世といへるか　契沖餘材抄に云人の世と
なりて後ちよの此ミ歌になりひて三十一字にさだまれるといへる
なるを思ふべくさくべしいひ歌によりひてよむとのこいづれ後世ハ
とゝりに三十一字の歌は多くなりくるすハかの此歌によりひてよむなる
あらたに人の世となりてもそへるむかしの卅一字の歌ハまさこのくせ定まるよう
始なるといふべしそれは君がよハわかねど自然によび聲がまじらくおほ
らくとのひてことふらハくさまうる時よ洩れたとものづからび聲が多く
なりゆくを見自然の事く神代よ卅一字の歌ハ八雲此御詠の初よ壊々
梓なるの御歌
あまつちハへおハかれどもさねどもあとらぬかくよそるもわちはやふるよ

豊玉姫命の御歌
あかだまハをさへひかれどしらたまの君がよそひしたふとくありけり
彦火々出見尊の御返し
おきつとりかもづくしまにわがゐねしいもハわすれじよのことごとに
右も古事記のまゝに書る也日本紀にもすこし異なる所あり人の代と
なりてハ神武天皇の御歌に
あし原のしけきをやにすがたゝみいやさやしきてわがふたりねし
同じ后伊須氣余理比賣の御歌に
さゐ川よ雲たちわたりうねびやまこのはさやぎぬ風ふかむとす
まく

うねび山昼ハ雲とゐ夕されバ風ふかむとぞこのはさやげる
これハ人の代となりて卅一言の哥の始なるべし
又問て云連哥ハ日本武尊のにひばりつくばをすぎていくよか寝つると
問ひ給へるを諸の御供人の中に秉燭者のかゞなべて夜にハこゝの
夜日にハとをかをと申たる是が始也といふハまことに然るを 菅云是ハ
日本紀に時有二秉燭者一續二王歌之末一而歌曰とあれバ後世の連哥のふ
るへのやうに思ひ侍れども實ハ續レ末なるをあらはせり三句の哥猶 菅云三句の
哥ハ日本紀にみえたるハ是が始なれども古事記にハ神武天皇の御哥に
こうぐもいやさゝがそるゑをとしまうむ
ともよみ給へるを又猶菅しる事ハ同じ御時に伊須氣余理比賣の

御哥に
あめつゝちどりましとゝなどさけるとめ
大久米命のこたへ
をとめにたゞにあはむとわがさけるとめ
これらあれバ日本武尊のを始といふべからず例の日本紀だのみとみえてた
事記をよくも見ぬ人のいひ出せる事なるべし又これハ續レ末とある故に始也と云ひて
いへど古事記にも續御歌とありて大久米命のハさいへどもなく答歌曰とあれバ
これを始とするも何もなきつきてもいふべくハ此哥のさま全く同じなれバ
ぞ我をさし置て後なるを始といふべからん續とある所になづむべきに
あらざる故ハ二紀ともに此の段ハ終にいひつゞくへきるまでを書る故

古事記下清寧天皇段云志毘臣歌曰オホミヤノヲトツハタデスミカタブケリ如此歌而乞二其哥末一之時袁祁命歌曰オホタクミヲヂナミコソスミカタブケム乞二歌末一とある續といふに似たり

されバ之後にハ三句のうたハ絶てまたく六句のうたをのミよむ世となりてハ
その三句のうたハあられぬ程に六句のうた此ちゝくの中にいへる程に其附のうたを
また續といひつゞくべしなどいひしかどもそのことによりてもると
いふうたを行歌ともいふことなれど嫁につけたる名目なるべしさて三句のうたハ
齊明天皇の御時の童謡にうたひきわざうたとこそ聞えてうたひとのまで
日本紀にのせたりまた弁上古にも三句のうたも折々にありけりそれを猶是
しるを連歌の始とせバ其神武天皇の御世の猶是が始ともいふべし是また
これ旋頭歌の上下なれバ世一字にある連歌にもあらで万葉第八ニ尼作
頭句并大伴宿祢家持所誂尼續末句さほ河のみづをせきあげて
うゑし田を尼作かるわさいひハひとりなるべし家持續とあるハ世一字にて連

後撰集第六
秋のころほひある所に女どものあまたものいひけるを聞て男のうたよみけるをいひ入れて侍れバ事を内よりあるじ人不知あるじの移ぐりあまたの数まされバ花のいろくさをあくらむ
是ハ時代あれバ

うたさだめされど是ハ一首のうたを二人してよめるその事之拾遺集
に内にさぶらふ女をちぎりて侍ける夜おそくまうできける程にうしみつ
ときと申けるをきゝて女のいひつかはしける

人ごゝろうしみつ今ハたのまじよ

良岑宗貞

夢に見ゆやとねぞすぎにける

といひ伊勢物語に業平朝臣伊勢へかりの使にまかりて斎宮に
あひ奉りける朝女がたより出すさかづきのさらにうたを書て出し
たりとて見れバ

かち人のわたれどぬれぬえにしあれバ

彦麻呂云清少納言に
蘭省花時錦帳下
とかきて末ハい
かにとせむるを
火びつにきえたる炭の
ありけるを
とりて草の庵
をたれかたづねむ
と末のことを
して書つけて
やりけるなり
連哥なりと云こと
詞花集巻九の詞
書にみえたり

とかくあはれなしといづきのことはつひに此の事をして歌の
事を書つぐ
まこと あふ坂の せきハこえ なむ
とよめるハまさしく此の連歌の連歌といふ名
同じ金葉集に始て下句をまづいひてかみの句をつけて上句を下てそれを
つゞくると拾遺集に見えたり　又同云　歌にちかまりハたゞしくうけ
給ひてねざめ此歌を物ハいひある事にあらでいでける物ぞ　前云
歌ハ物のあはれをしらずいひでたるものな　同云　物のあはれをしる
とハいへるなり　前云　古今序にやまとうたハひとつのこゝろをたねと
して万の言のはとぞなれりけるとあるこの心といふが則物のあはれを

しる心也次に世中にある人ことわざしげき物なれば心に思ふ事を見る物
きく物につけていひ出せるなりとあるも又則物のあはれを
しる心也上のひとつこゝろをといへるハ大綱をいひこれハそのくはしきをのべたる也同真
名序に思慮易遷哀楽相変といへるも又物のあはれをしる事をいへる也さて
物のあはれをしるといふ事ハまづ世中にいきとしいける物ハみな
情あり情あれバ物にふれて必思ふ事ありこのゆへにいきとしいける物
みな歌ある也其中にも人ハことに万の物よりもすぐれて心もさとか
ければ思ふ事もしげく深し其うへ人ハ禽獣よりもことわざのしげき物
にて事にふるゝ事多けれバいよいよ思ふ事多き也されバ人ハ歌なくて
かなはぬ理也其思ふ事のしげく深きハ何ゆへぞといへバ物のあはれハ

拾玉集
うきもうしつらき
もつらしとばかりに
こころある身ぞ
なげかれぬらむ

白氏文集巻十五
劉家墻上花還發李十門前草又春處々傷心心始悟多情不及少情人

見る事きく事ふるゝ事しげき物なれば事にふるゝごとに情はうごき
てしづかならずうごくといふはある時はうれしくある時は悲しく又ははらだゝし
く又はよろこばしく或は楽しく面白く或はおそろしくうれはしく
或はうつくしく或はにくましく或は恋しく或はいとはしくさまざまに
おもふ事のある是即物のあはれをしる故にうごく
とはたとへばうれしかるべき事にあひてうれしく思ふはそのうれしかるべき
事の心をわきまへしる故にうれしき也又かなしかるべき事にあひて
かなしく思ふもそのかなしかるべき事の心を弁へしる故にかなしき也
されば事にふれてそのうれしくかなしき事の心をわきまへしるを物の
あはれをしるといふなり其事の心をしらぬ時はうれしき事もなく

源重之集
あはれをはかなしと
おもへといふの言に
なきくもあらぬ
づきもか

かなしき事もなければ心に思ふ事なし思ふ事なくては歌はいでこず
さればいきとしいける物はみなそれぞれにつけて事の心をわきまへしる
故にうれしき事もかなしき事もある故に歌ある也其中にも
事の心をわきまへしるに深浅のくらぶべくもなく禽獣は浅くかぎりあれば人にくら
ぶる時はものゝこゝろをしらぬがごとし人は禽獣にすぐれて事の心をよくわき
まへて物のあはれをしる也其人の中にも浅深ありて深く物のあはれ
をしる人にくらぶる時はむげに物のあはれしらぬやうに思はるゝ人もある
てたぐひ多かる故に世には物のあはれしらぬといふ人も多き也是は深きに
しらぬやうなれど深きと浅きとのけぢめぞさて歌は物のあはれを
しる事の深き中よりいでくるぞ物のあはれをしるといふ事は大

古今集序に
おほくのものあはれ
と知りせよといふを
真名序には感鬼
神といへり此れ感
ずるは則あはれと
思ふことそ

異かくのおしなべていへば事に感ずるが則物のあはれをしるなり感
ずるといふは俗にはよき事にのみいへども感字は字書にも
動也と注して感傷感慨などもいひてよろづの事にふれ
て心のうごく事を移るにいかなくは悪事也そよき方につきて心に移ふ
るものを感ずるといふ賣豆留といふに感の字をかくはよろしからず感の字を
めづると訓ずるはあしきなりめづるも感ずる事の一つなれバ感字を
めづるとよむも感字ハめづる事ぞのみならずねバめづると訓じてハ
字義をつくさず何事にも心のうごくを感ずるといへば深く思ハ
れ感ずる事なれバ是が即物のあはれをしる事也
紫文要領にもくはしくいへりさて阿波礼といふハ深く心に感ずる辞也

是も後世なるたゞのあはれといふ事をいひて哀字をかけるは哀ハたゞ
阿波礼の中の一つなるのみ阿波礼ハ哀の心ばかりにもあらず万葉にハ阿怜
など書く阿波礼とよませたり是もおもひとるさまにつきてかける物なるべく
阿波礼の義理ハつくさず阿波礼ハ只嘆息の辞にて何事にても
心に深く思ふ事をいひてとにもかくにも歎ずる詞也阿那といひ阿
夜といふと同じたぐひ也仁賢天皇紀吾夫阿怜矣此云阿我圖摩播
那とあり皇極天皇紀に咄嗟を阿夜とよめるなどあきらかなるべし又漢文
に嗚乎于嗟猗などいふ字を阿々とよむ事多し其阿々も同じ歎詞
なり古語拾遺云當此之時上天初晴衆俱相見面皆明白伸手歌
舞相共稱曰阿波礼阿那於茂志呂阿那多能志阿那佐夜憩云々

此文なきがひとつといへども古語とこそきこえ侍る是ハ天照大神天の岩やと
より出給ふ時の文に阿波礼ハ言ニ天晴一也などあるを後人の
狂妄なるもしろく信ずるにもたらば常に此文にまどひて阿波礼ハ天晴の
こととおもふ人も今に至る辞ざるところに阿波礼阿那とかさねていへるもまたか

歎辞之日本武尊の御歌に
尾張に直にむかへるひとつ松あはれひとつ松人にありせば衣きせ
ましを大刀佩けましを
やがてこれ也かたくとけるがあけるをいつくさハまさきさみしにあはれ
此外思ひつまあはれ彩服あはれなどいふ言を聖徳太子の御歌にも
いひにてこやせるそのたびとあはれとあるも猶かくこそハいひしれざるの

みなみなかなしくあはれなる事をもあはれと思ふといふ言になれど又これハ後世のこと也
上古のことをあはれびにはもこれ歎辞にして彩服またや旅人あやまといふ
同し日本武尊の吾妻者耶とのたまひ允恭天皇紀にいわびやまと
なしみて宇泥咩巴椰弥々巴椰と新羅人のいへるなど思ひあはせてしるべし
さて阿波礼牟といふ詞ハあはれと思ふことをしと思ふをうかしむといふ
挹これバ是も速く深く盛ずるもすぎして事またあはれむといふを
あはれむといふ愛する事なきかぎりに我を見ての詞の身ひのうちに
世にいふ人にもて我の心をもたがひいむく事多き抑かく阿波礼といふ歌息
の詞を後かたるやうにいひてもしづかに思ひなれる也万葉集に大伴
坂上郎女

玉川の世にある歌もしるせるを思ひてあるもしこがなにはあはれ
びあはれも古事記日本紀の歌どもにあまたあると同じいひざまなりまた

作者未詳

なごの海の朝なぎしたれば海中にかくぞなくなるあはれそのとり

うきとしたるのふるさと郡云なごといふ物がたりかはりあはれそのとり

これは同じ言にていひなしたるこれは文字は憫怜とかけり

此二字を仁賢天皇紀に播耶と訓せばあはれも歎ずる辞なれば

べし又万葉第十八におきなぎものなくを先てよめる長歌に雞鳴て

うちなげきあはれの鳥といはぬときなし

これは賞し給のよろこびに絶えず奏しまたはひとへ言にいひなり

これらは上つ代の歌によめる也 一松あはれ旅人あはれあはれといへる

など皆よそ物に触て心の感く時に発あはれと歎ずる詞也あはれ

といへるとよめるもあはれてなるといふもむかし是も同じく歎ずる詞なり然る

に今のあはれとのみよめるいひならはしなれども猶ひさしく歎ずるあはれと歎ずる詞を

さしてあはれの鳥といへるも聊かいひならはせるなり古今集に

あれにけりあはれいくよの宿なれや住けむ人のおとづれもせぬ

あはれ昔へありきてふ人丸こそはうれしけれ

拾遺集に藤原長能

東路の野路の雪まをわけてきてあはれみやこの花をみるかな

これらのあはれは全く歎息の詞にて後世とこの一格あり俗に天晴(アッパレ)

といふ詞ハ此あはれをつゞめていへる也又古今集に
とりとむる物にしあらねバ年月をあはれあなうとすぐしつるかな
又長歌に
すぐる世の中を思へバひとつねにあはれ／＼となげきあまり云々
これらも歎息する事也又土佐日記の詞に聞の名あはれ／＼と見えて
也くさきで見ゆり九八云くと行も同じく心の関に歎ずる也又古今に
あはれてふことをあまたにやらじとや春にをくれてひとりさくらむ
あはれてふことだになくば何をかは恋のみだれのつかねをにせむ
あはれてふことこそうたて世中を思ひはなれぬほだしなりけれ
あはれてふことの葉ごとにおく露ハ昔をこふる涙也けり

後撰集に
ちることのうきもわすれてあはれてふことを種にやどしつるかな
あはれてふことにあかずも世の中をおもひかれしとおもひてせくらむ
きく人もあはれてふなる別れにはいとゞ涙ぞつきせざりける
これらの歌にあはれてふとあるハあはれといふ言なりけりにはあれど
ことの葉ごとにみだれ出つる事なくおもふべしさてそのあはれといふ言とハ人に
深く感じてあはれ／＼と歎ずる言にてその事に物をえてとゝのへる歌の
やさ人のそれはあはれ／＼と感ずる詞を他へ也るを己がしりてあはれむなど
事に物をふみひかれさせることをあはれと云は是にならべて
づし万葉集作者未詳

まことの花常にむかへるあはれ鳴あはれと見ていはぬ日はなし

古今集

世中にいづらわが身のありてなしあはれとやいはむあなうとやいはむ

後撰集

あはれともうしともいはじかげろふのあるかなきかにけぬる身なれば

拾遺集

あはれとも君だにいはゞこひわびてしなむ命もをしからなくに

あはれともいふべき人は思ほえで身のいたづらになりぬべきかな

こぬ人を待よまちて久方の月をあはれといはぬよぞなき

これらのあはれといふもいづれも心に感じてあはれ〳〵と歎ずるをあはれと

いふといへることばは人をあはれといふは人に感じて歎ずることが多きを

あはれといひ月をあはれといふをさへいひし也又古今

よそにのみあはれとぞ見し梅の花あかぬ色香は折りてなりけり

むらさきの一もとゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る

拾遺集

山里は雪ふりつみて道もなしけふこむ人をあはれとはみむ

月影をわが身にかふる物ならば思はぬ人もあはれとやみむ

これらのあはれといふも心にあはれと歎じて見るこゝろ也

これらもあはれときこえていづれも同じこと也又古今に

彦麿云
源氏横笛に
深き夜のあはれは
すゞけしところ
わきまへやいひける

色よりも香こそあはれとおもほゆれたが袖ふれし宿の梅ぞも

我のみやあはれとおもはむきりぎりすなく夕かげのやまとなでしこ

ふちくえもあはれとぞ思ふよそふさくも人にまかせつゝ志るなき

あはれともうしとも物を思ふ時などかなみだのいとながるらむ

ちはやぶるうぢの橋守なれをしぞあはれとは思ふとしのへぬれば

拾遺集

男ならば露をあはれと思ふのれあはれさきことはいかで思くらむ

これらはあはれと思ふとあるも同じく心に感じて歎ずる義なり

うちなくあはれと云あはれとあるはあはれとさくあはれと思ふことを

物にふれてかなしく歎ずるすゑさきそ又拾遺集に

思ひでもなきふるさとの山なれどかくれゆくはたあはれなりけり

年ごとにさきはかはれど梅の花あはれなる香はうせずぞありける

これらハ此歌どものうへにあはれと歎ずるをさしてあはれの

名とよまれたるやうに物ごとの心に感じてあはれと歎ぜらるゝと

いふこと又あはれなる事とハあはれと歎ぜらるゝ事といふことにて其の

ふかきふしあるあはれハそれ其の類にて歎の類にいへるなり 如此

後撰集

あたら夜の月と花とをおなじくはあはれしれらむ人にみせばや

拾遺集

春はたゞ花のひとへにさくばかり物のあはれは秋ぞまされる

この外に難なの見えきてかくのごとく阿波礼といふ言葉をあまたいひて
うれしきにもかなしきにも同じやうにかくいへる所々あるは、さすがにそれぞれ情の
深く感ずる事をいふなり。俗にはたゞ悲哀をのみあはれと心得たれども、さには
あらず。すべてうれしともをかしとも楽しとも悲しとも恋しとも、情に感ずる事は
これ阿波礼也。されば面白き事をかしき事などをもあはれといへること
おほし。伊勢物語文などにもあはれにおもしろくあはれにうれしくなどつゞけていへる所
伊勢物語に此男人の國にまかりて、菊をいとおもしろく咲きてありける
おもしろくぞあはれなるとあるも、菊を面白く見るに感じての折
うれしきもあはれなる也。嬉しき日にあふもあはれにいはれたる
是也。これなどみな是又あはれと見るべし。嬉しき事にあはれといへるなし

新古今集　清原深養父
うれしくはわするゝことも
ありなましつらきを
ちぎりてぞありける
見られきは情の
浅き中なる

源氏などにもかなしきとあはれなるとを對句にして
いへる事も多し。是は總じていふ時のあはれと總じていへど
悲しきもあはれの中にこもれるを、わかちていへば人の情の
さまざまに感ずる中に悲しきすぢにはさまで深く感ぜねども
うれしきことおかしきことなどは感ずる事深からねば、殊にあはれと
いふなり。されどかなしきは感ずる事深きゆゑ、悲哀をのみあはれといふ
ことく、あはれといふ事のわかれ、俗に悲哀をのみあはれといふ事のごとく
なるぞ。されば花といへば桜の事に定まりて、花といひて桜の
事とするがごとし。源氏物語にも梅花を花のさかりになべてならぬやといへる
あるは又十二律といへば六律六呂とも反對する
に因りされば阿波礼といふ事を情の中の一つにとりていふなり

いふ味の事也　ことをいへバすべて人の情のことにふれて感くをバ皆阿波礼
といふ也　人の情乃深く感ずべき事を見聞てハ物のあはれとはいふぞかし　さて其
物のあはれをしるといひしらぬといふけぢめハたとへバめでたき花を見
さやかなる月にむかひてあはれと情の感く則是物のあはれをしる也
是其月花のあはれなる趣をわきまへしる故に感ずる也　その
あはれなる趣をわきまへしらぬ情ハいかにめでたき花見てもさやかなる
月にむかひても感くことなし　是則物のあはれをしらぬ也　月花のみにて
あらず　すべて世中にありとある事にふれて其趣心をわきまへしりて感
ずべき事にあたりてうれしかるべき事ハうれしく
をかしかるべき事ハをかしく恋しかるべき事ハ恋しくそれ〳〵に情の感

くが物のあはれをしる也　是を何とも思ハず情の感かぬが物のあはれを
しらぬ也　されバ物のあはれをしるを心ある人といひしらぬを心なき人といふ
なり　西行法師の

心なき身にもあはれはしられけり鴫たつ沢の秋の夕ぐれ

此上句にてしるべし　伊勢物語にいはく　むかし男ありけり女をとかくいふ事
月日へにけり　岩木にしあらねバ心ぐるしとや思ひけむやう〳〵あはれと思ひけり
土佐日記にいはく　いふかひなきさへかく思へバましてこと人ハあはれとなく
これらよく物のあはれをしるといふ味をしるべし　猶くハしく紫文要領にも
いへり　さて物のあはれをしるより哥の出来る事ハ古今集第十九なる哥
奉りし時の目録の長哥　ちはやぶる神の御代より呉竹のよゝにも

源氏松風巻に云
むかしの人もあはれと
いひける浦 考へこそ
やくまにて云に此所
まあはれといふ詞ハ

絶ずあはれの春雨の心は言葉思ひしられなく五月雨の空もとどろ小
さよふけて山時鳥なくごとに誰も寝ざめて庭訓小田の山乃あち葉
とりてそのことを神の月来ましく冬の夜乃庭もたてればあはれ秋
きえて年毎に時につけて阿波礼といふことをいひて其のこころ代々を
いふ世の人乃思ひきるかぎりの様乃ゆゑ思ひもあはれしくさるなど
煮もおほるんとやらざるは云のそごとに云く此まるやうなればいゆ
ふるまへるなどいふ中におほくあはれ序に万葉集よりつぬかさなるなく
しめ給ふとあることばの因縁の心を神代よりこのかたる四季恋雑の
さまくのおほんとりくに一つの物もあはれよりいできざるはなく此
世の中の因縁の中に四季と恋雑とのあるに年ごとに時につけ情くあはれ

あはれとも此浦の
秋夜のきまま
感して此言をよめる
をさして所あハ
あとといひけるとて
おもへ言よるむハた
わきと云と同し
すべし

山家集恋の哥
の中に 西行
なきまさるらんやも
ものことくさきて
あはれもふかくなる
なりぞ

ちふことをひつといへれどさもおほくの四季恋雑の中ハさを時につけ情く物の
あはれにふれてあはれにあはれくと歌じていでつるなどいふ事など物乃ひ
あはれの心を因縁によりてよまるる古今之後撰集第十八に云ある所にあくをれ
前よりまでれ物思ひしゆりけるをききて聞より女の許におもちしく物の
あはれ知りがほなる翁かなといふを見て貫之

あはれてふ言にしるしはあらねどもいはではえこそあらぬ物なれ

おもて物のあはれなりぞでる旅に家にある人をきくしく物のあはれ知り
顔なりといへることを聞きて返しにあはれてふことこそあはれなれ
おまもふかく物に感じて歌よみ給ふあはれくあはれくとおもひて歌じ
あれはそ何の益もあらねども物のあはれにたえぬ時ハいはでハあられぬ

物ごとにそは親なるにあやしく物のあはれをしるべきわざなるといふはひとへに無心なる
事をしらぬ獣なるものすらかばかりにいはんや人は通過ぎたるを
ゆくりなく見るにも物の哀も知れど物のあはれは知らぬ時はよのまぎれに
あはれぬ物をとは下なるも日記にさまざまもうるさきもあはれまたぬ時の
まことによしとおもふもすなはち又この物をあまりにいふもあまりぞおほ
かるといふも嬉しさあるを情に嬉しくそれを思ひ知らずにをかしとも
われも情の感く物のあはれを知る万葉物語某の序巻に
なかくは情とのみといひてこそ物しきなきもめでたくかぬあはれをいふも
人はまづしぬもの心をとかるをあはれとまなびて一つの情けなくいふ
事業にいふがなしいふ時を物しきをめでさる物のあはれを

こゝろをしりてなほ物のあはれなりと思ふ事をしるべし　問云なほ物の
あはれをしるよりぞなにかはかけはなれぬさて物のあはれを知らぬ時と
いかなるをかくいふぞや　答云なほむかし物のあはれしらぬ時の
さまざま物のあはれを知らぬとをまづ物のあはれをなるまでにあらでもあはれを
しらぬ人はあはれとも思はずあはれと思はねばなにもいはでこそへば物ごとに
くしく神ありさまげにを耳なれたる人をこそしらねばあるとも物にはぞ
なると物もしらねば物をうつしとも思はぬがなしそのうるに物のあはれをしる人
はあはれなる事にあひてかくは物もはしとしれどもあはれを物もしらぬ人とをも宿
ぐさし耳なく空人を捨てれしとまれ物を驚しく鳴きておもむきなし
さてさやうにせむかたなく物のあはれなる事なくさて時はさてやすき

とやかくとも心のうちにこめてはやみがたく。ものびやかにしこれを物のあはれは
しらぬ人にいひきかせてさはやかに晴るゝ時は物のづから心もはるゝ
事也。さればいひ出る詞もかくのごとくあはれにうつくしく物のづから
ほどよくのびやかなることばにて必ながく延(ヒ)てあやある物也。これがやがて歌の道のけしく
あがむるなどいふは此時の事也(はすゝ下に)いはゆるしもそのつく詞にあやをなし聲を
ながく引ていひ出るはあはれもふかくと聞ゆるもの情の深き故なり
これ心にもとせざれども自然にいでくる物也。あはれにたへぬ時はいかにと
あのべども物のづから其物のむきのいでくる物也。まことに歌も心のいひむき
えこそ堪ぬ物なれどもうまれながらあはれにたへぬ時は必
是をば自然と云。さ心(?)出る物也　問云。古人へ(?)ぐさき時はまことまごと

是をいひ出るはさることなるべし。其思ひあまりてはおのづから聲ながくなるなり
を聲をながくし詞にあやをなしとかくなぐさむべし　答云。今の人は
心あさくして銀をまつる事なりし也。ごく万の事をすべて詞くらく其の
あぢはひを考ふべし。其の心をこそよく見べきに歌はさまざまに物おもひを
其の心にありてあぢはふべし。まづ今とは物の甚しく悲しき事にたへかぬる
其の詞にいひ出して聲をながくし詞にあやをなして詠じ出ることをとくとて終まる
心をあはれに思ひてきこえずといひ出るは物のづから詞にあやをなしてもくもく出る
物なりそれを古の詞には今はあはれの深き時の事也。深き時は自然を
あはれにてもくいでまさる深きあはれの詞にいひてはあさき心ばへの同じ
一言ともくあやをなしていへば心ぞうるはしきの詞にてはいかなるゝど

神代紀に天照大御神天磐戸をさして籠り給ふ時に児屋命廣ク厚キ称辞しを祈ニ啓シ給ふ時に日神聞之曰頃者人雖ニ多請ニ未ニ有ニ若ニ此言之麗美者ニ也乃細開ニ磐戸ニ而窺之云々 是をも祚乃

なくなくといひてもいひつくされぬ深き情も詞にあやをなしてながくう
たへば其詞のあやによりてかく情の深さもあらはされて感ぜしむ
る詞のなだらかにあやなして長き声に歌ふ時の深きあはれになりて
感ぜらるれ鬼神もかゝる詞なくいふとてもいふ様あはれなる趣を
きても感ずる事深しこれを詞にあやなしてながくうたふ時を
きく人のあはれと感ずる事こよなく深しこれぞ歌の自然の妙なるによ
神のあはれと思ふ事をことにあらはし出るまゝにいひても猶物たらずこころ
しるく感ずるゆゑなるべし今日によくなる事をよくいはで今人世にふ
物のあはれき事ある時嬉しかるべき事にも其あはれき趣をつゞくといひつゞ
けても猶深くあはれむべくもあらぬ文ひとつなるにあはれなりとやその詞に

言の羅美に感給ふなりと見えたし
源氏若菜下巻に明石入道の願文のことを云く手つ(?)
いときよらにて猶ゆきの(?)
のまへにしく仏神
もきこしめしつべき
ことのはをあきらかに
云々これも言葉に
めでたまへるなり

いひ出ても猶たらぬさの忍びがたくてなげきの声にあはれ其心を
なげておもしろくもなくもながくうたひてむねにせまるなげきをはらし
其時の詞を其のづからながくあやなして歌ともくうたふ也を仰せ給ふを
物こそ見ゆれ其のこゝろをなどの詞には必ず其るべくまた自然の詞にやありや
歌のもとはまことひなきあはれの深きはあはれなりてかくの如く物のあはれ
むすぼるゝ思ひをあれやこれやとひ出るくらゐのあやなる詞ながくの根本に
しく其の詞をそ文のやうに見てしかしく始とおもひがたび出るものはあはれ
でよまむと思ひてよみ出るなるものあはれもすなはち物のあはれに見ぬ詠の
むずかしき故ハ始く物のあはれなることをよくんのうちにあはれ思のびがたき
情にかなひの詞によひ出べき猶いひ出ぬ時ぞあはれなる趣を辞にあやを

なし猶かくつゞけて数もくさ〴〵なるをさぐりもとむるに万葉
ふるきつゞけがらく深き情も見ゆるに三句五句の歌は時によりて見ゆれど八
それの体はさて文武の御時よりおほく見えぬ時にさへあるにしても猶あるは
そのつゞけがらくわろきが多くなりて時を年にふりて風の吉野の跡に泥
てそれよりのべ歌は国によりて花の色ひ香のまよりさまことにうつりて事
あり古今序によりて出でたる中にとりもかくもよみつけていひ出たるは見え
なりのまゝをいひそへていひつくされしぞありしがたきわの心わかれもさまざまになる
おきく物につけゝにせばかならずおほく深き情もあはれもやさしきおもひさせてぞ
ありける神武天皇の大御代に
みつ〳〵し久米のこらが垣下(カキモト)に植しはじかみ(薑)口ひゞく我はわすれ

じうちてしやまむ
これは長髄彦をうち給ふ時の事にてこれよりさきに孔舎衛坂といふ所
にて五瀬命の矢に当らせ給ひし時に御兄五瀬命ながれ矢に中られ給ひて神さり給ひし
事をおぼし出て深くうらみ思しめしてかくはよませ給ひしなり薑
ひて辛味の口にしみてひゞくをわすれがたくおぼしめすに譬へ給へる
さて序によりてこそは古今集に
書紀のこゝろ此歌を載て此歌は思ひにあたりけぬべし
物に託くはじめにも有し其ころの歌にもよくあらはれて
かの文字のなかりし世のあはれには多くあれど
さはことなる表ひいふべきを物に託しくいふことあり伊須氣余理

孝暦云 古今集よ貫之歌を思ひしきはハあはれ[illegible]の歌を[illegible]月の歌をとこそあれ

比賣命の御歌に

さゐ河よ雲たちわたりうねび山木の葉さやぎぬ風ふかむとす

うねび山ひるハ雲とゐ夕されば風ふかむとぞ木の葉さやげる

此うたハ神武天皇崩じ給ひし時に手研耳命の弟皇子たちを殺

さむと謀り給ふを皇子たちの御母后かなしび給ひてひそかに知らせ

給はむとて風によそへてかくよみ給ひしを皇子たち此事を知給ひて

ふせぎ給ひつとぞ手研耳ハ其母の兄なりしかど

なほ[illegible]物につけて物のあはれをいひのべたる歌にて此うたハ

さらに其跡をひきよせて[illegible]たぐひまれなるもの也さに

黒主思ひ出て悲しき時も初瀬の峰にてよそに人をもこひわたるをあはれなる心のあるに貫之の歌にも月の黒主の歌にも初瀬の峰をよみ歌の[illegible]文字ハのがれぬといふことをよくたへよをおもひみて歌をよみたてゝあるも

あはれをしらず心は深く物のかなしき時も耳にふれて物ごとく

ききぢに思ひくらべられてあはれなる物なればやがて歌によみ出るひ

いづれおのあはればかり是又自然のことわりなれバやそしてあはれぞ

さて又あるといふ物ハ物のあはれにたへぬ時よりいでくおのづからなる

のこらずもあはれいでてあはれの深き時ハさまざまのことばのあまりてなか

猶しもあはれをたへぬかぎり人にきかせてなぐさむものなり人のこれをきゝ

あはれと思ふ時ハいくらか心晴るゝもの是又自然のことなればこそ

今人せちに思ひて心のうちにこめ思ひがたきことのあるときもあながちにおしこめて

思ひあまりて言ふにつぶくとよびつげて心のはらさぬ物なればそれを人に語りき

かせまほしくなるものなりされバ人もげにもと思ひてあはれがりて

なぐさむのみにもあらず物えされば歌づくりにふかく感ずる事あるは人に
いひきかせではやまざる物也あはれびはめづらしくあるをおもひしき
ことを思ひしるをばさて又人に感ずる所を必人にもいひきかせ
まほしくなるにいはでもさていひきかせつればそれも人の心にも感じ
行の事もあはれなどもいはるゝが思ひ入たる自然の事なりとてあはれにも
ひんがしある物なれば人にうちきかせねばやまぬもの也まことの義ありて能
今のよにうたびとをさへさまぬ人はたゞむかしの事をよく心得て
くるものまことにいふそ実のこゝろなきを人の心まかせてよろしきは実の事
にあはれとおもふ心を思ひ出てけむと思ふれけることといふ物のまことの義を
あらはしたる問賢註乃前の問答にいへる所は末の事なれど

慈鎮大僧正集
これしるしなきを
遊ちぎりにひて
さはさることよ
人にもしらむ

歌の源をたづぬるに此道といふ物は人の心ふかくあはれと思ひしるが
大事なれば其綱にあやをなし其をまたよくもてあそぶが故に
其詠かく神代より其のあるすゑ是残す人あはれと思ふゆゑにこそあれ
のみもあらずよしあしく人あはれと思ひしらざればこそのみの心のかる
うちとく思ひしる日本の事也今世中にあるなりといひてらむべし
心よりあるすゑ人にいひきかせずもあらん人あはれと思ひしらざればいかにいひ
しかしあはれときこゆればこそあはれにしあはれと思ひしらざればいか人乃
ことてあはれとやいふが紫式部も神代のむかしとても思ふ心のいかなる
ことやあらむもあやしくおもしくあはれならぬこそ
物も妻といひもむとてはまづ歌のとしひいひ初といひもむとてはみな物の

うち出るなげきなどする詞をあやなしく詞をほどよくとゝのへむとさ
ゆゑなるべし 好也
旋頭のやうなるハあまりながゝらずみじかゝらもへだしておもしろけれ
ことばもうらきてあぐていづれもいづきとそらひしるゝむ
よきほどのことぞや歴るをもむらづきやたゞまのうたどもの志ざしなど
うたへる物なるゆゑに二句よいひてのこり三句をたる詞のおやとせしかば
いひぬ物のやうに物なる人をもつぎられど新奇の詞をおやにようて二句乃
あはれなるのをく深くあるべし万葉集はひさびひことに多くして
までのことぞと云えれるかりうられしるまでの詞をも意をつぶくせ
いひつぶけんことをまうハとるゝ不安なれども猶いひよいはれぬ情乃

あはれなるなるでハのべがたしまのまよいはれぬあはれの深きところ
のなかにのべあらハさるゝ歌もあるとやよ詞によおやをあやもかきくよ
ながやになりてこうつぶかるおはれもなかくはかなさうとやまうといひ物ハ
たゞの詞ありやうに事の意をあらしくつまびらかにいひのぶる物ならば
あるいハ文章詞に深き義理のあるなるもあるいハくわしよあはれと
物思ふ事をとくいひのべくうち思ひたるまでのことなれども歌の中に
ことひもなくうぎりもなきあはれのかぎもなる詞にあやなる故也
又問云歌の字の義ならびに和訓に于多といふことハいかで 答云
とりたる大よことばにやむかしことはハまづおほよそかの字ハ
義をとひ又于多を和訓といひし事を歌いはれなきさるゆゑ于多ハ

神代よりいふなる歌の字ハもろこしに婦人の出より来れる由え
されバ于多といふ言に歌の字を借用るまでのことなれバ于多といふ
詞のことばとあらなバ歌の字の義ハあらじとも言ひなむわれも歌の
字の義をも字よとりて事ひろく見え又和訓といふ名目も人の口に書
籍文字よつきてくいふすにさるとおもへそのことをいふ時よ古言を
訓といひつることなりかし于多ハ神代よりいひ来れる詞なれバこそ古
いろぞ歌の字の訓なるむもとづくさ方の詞を和訓といふハあくまぬ
事ゝ于多といふが主にて歌の字ハ僕従なりもとづくよろづそれは主と
出て言を主とし文字を僕従とすべきこともよくまなぶべき事なれと
来とも見さまのつゞきこともよりて其の名よおきさく八今よいへるまで

禮 井ヤハ體なり
日本紀に井ヤフ
と訓を是用あり

神代よりいひ来れる言を主とするなれバ何事も詞の上をも
よく考ふべし文字ハ全く仮の物なれバ義を嫌くいふ事の物なおぶ
まぎるゝ所あるに人それひことわりをとときまへず文字を主として
古言をバ仮の物の如くに心得てよろづをいふ者に熱ごとを多し之れ
和訓といふ名目をいひ出しよりもひおやまれることもいうなのの事に似
たるも漢学者の心なる害となることいと称かしく辨ずるなり
さればまづ于多といふ言の義をいつべき事え于多ハ于多布の
轉なり于多布ハ于多の用言也もとづく一つの言を轉と用とにいふさびひ
多し之れは二つの分なり一つにて轉の言を下にもとらく言を加へつく
用とし省きて轉とこのみて轉を主とする留を加へつく

耶杼留といふハ用ゐし留ハ良利留礼とはたらきて中にこむとも云べき
ものをそれともいふべし束ハ體都加奴ハ用なり又奈祢などもはた
らく事上に同し綱と都奈具腰と波良牟丞と伊奈牟段も
幾邪牟などの言ひも同じ又味と阿遅波布友と登毛奈布
幣と麻比奈布のたぐひハ體の下に二言を加へて用となり下の一言
中にてはたらくなり于多ハ于多波牟于多比天于多布于多倍などゝ用
の時ハ下の一言波比布倍とはたらき一言をくはへて體なるを
さらに二つなる下のはたらく言をやがて體にしたるなれバ思といふ
言ハ用なく於毛波牟於毛比天於毛布於毛倍とはたらくを於毛
比といひて體なるもあるは用にいふ於毛比と體にいふ於毛比とも

言にかよふ音にうつるなり薫祭渡扇趣歎施勝装疊などのたぐひ同じ
格なるが下の一言を幾志知比美理などの第二の音にうつして體となる
事思に同じ今の世に謡といふ物ハ此格にて宇多布を比といひて
體になしたる綱なり是ハ于多といふに同じき例ハおなじくいへる耶杼留
といふ用の綱耶杼理とも耶杼理とも體にいふがごとし又延計世天
祢幣米礼などの第四の音にて體になるを栄といへバ用なる佐加
延牟などもはたらくを佐加延といひて體にもなる也助序調
教などの皆同格なるがゆゑに體にも用にもいふ言どもハなかハ體の云
なるを物によりてはたらかして用の云になしたる又用の云を體に
なしたるものなかにはさまざまあれバいへる人の云くいたるつけにハ用に

詞のいと多くて歌の言はもしくなし さればは両用の言はいかなるか凡此
言なるを好に歌なるといふとこれもさる事なれど詞によるべし
よりて按ずるに上にあぐる二様のうちただ此をよくくらべやがてく
歌になして薫(カヲリ)とも助(タスケ)ともいふべうなるは其の云がななるづくる文
宿束(ヤドツカ)のなびひは歌がなくして其是に言を加へて其中もいふなる
べし左證をよく考ふるに其のおもむきを定めがたくこそあれど右のとほり さればは宇多(ウタ)ふ
宇多布(ウタフ)もいづれとかともなし其定めがたしされど右のとほり
あらがひて宇多(ウタ)といふがなかるぞそれは言をもいふつらく宇多布(ウタフ)とも宇(ウ)
多比天(タヒテ)とも宇多波牟(ウタハム)とも宇多倍(ウタヘ)とも用の言にもいふなりし
其にいへる事は古事記建内宿祢命の言に宇多比(ウタヒ)都々(ツヽ)麻比(マヒ)

都々(ツヽ)といふ詞あり日本紀にもいひならはしたる歌に宇多(ウタ)といへるは
神武天皇紀に謡此云宇多預瀰(ウタヨミ)とあり左證とされど是は地乃詞
なく後ながらもいはゞ名のもとに其詞の詞といふ是は此部に宇多(ウタ)と
いへる事にあらずといへどもかくまで深く考ふるにもあらぬべしなど
宇多ハ宇多布の体宇多布ハ宇多の用とも心得べくあらむかぎりて宇
多を宇多布と体用にいふべきもいふも前の事也是は後のものなる
べしさて宇多といひ宇多布といふ言の意は一説にうたふと云事乃
うちに思ふ事を告訴ふる意といふ今按ずるに其中にあるといふと云
ども刑部省を和名抄に宇多倍多々須都加佐(ウタヘタヾスツカサ)とあればは宇多布(ウタフ)
留(ル)がなき略して宇都多布(ウツタフ)といふは俗語なればは宇多布(ウタフ)と宇多布(ウタフ)

續日本紀第三十
歌垣のうたをとる
ところ哥二首をの
せてまた次にいはく其
餘四首並是古詩

留ルと同じこともあるべけれバうたも一説にハ備はるべし はかりいふべきこと
いまだ考へず 推古天皇紀蘓我馬子大臣のうたに宇多豆紀摩都（ウタヅキマツ）
流ルといふ言もあり 同云歌字の義ハいかに 善云さきにいへるごとく
字義ハ考るにおよばねども 同云于多（ウタ）に歌字を用ゐるハいかなる故
ぞや 善云うたはまことをいへるをなすもの于多に歌字かく也云ハ
まづ于多と詩とところざし本同じければ 此事既にいへり されバ于多ハ此方の
詩也 万葉集第十七に倭詩といへる所あり又文字を二上山賦立山
賦などいひ短哥を並一絶並二絶短歌一絶などもかけり又第五
于多を詩とかけるところあり たゞし是ハ詞字を寫し誤れるにても有
べし 又續日本後紀にも詩といへるありされど詩をとなへし于多之

云くこの詩字ハ詞
字の寫誤なり

彦麻呂云説文に
長引其聲以詠
之也

詩ニ揺云作歌

このかたに古今序にも加羅能于多（カラノウタ）といひ土佐日記にハ加羅于多（カラウタ）など
いひ源氏物語桐壺巻にハ毛呂許斯能于多（モロコシノウタ）といへれバ于多にも
詩字をまづ書べき事なるに是を捨て歌字をつく事ハいかにといふに
尚書舜典に詩言志歌永言とあるを詩と歌と二つあるにわかれて
八部詩をもくはへつけ故禮樂記に詩言其志也歌詠其聲也と
いひまた歌之爲言也長言之也といひ説文にも詠也と註し漢書藝
文志にも詠其聲謂之哥とあるをもと歌字ハ聲にのせていひてうたふする
歌といふ義なりけりといふともこれをのうたふとをさしく別歌とものいひて
辭にもいふすなはち文選にも載せて歌といふ物もあるなれどしかるに
辭の別にあるをかくぞ詩と同じきさて後世にいたりても歌字ハ

辭なれども用ゆるハ辭に云といふ物を捨ざるにその大抵をいへバ
正しく詩にハわろき緒にも詩に似たるものゝたぐひをつゞく歌といふさて
詩字ハたゞり後世よりいへるを辭のことをもちひて用ふるもありけるなし
歌字ハ右のごとく辭にも用ゐとも甚だ用ゐしく字義も移りてもよくしるく
うたふことなれバ此方の于多布といひ于多といふ言のことも辭用よりふ
而もよくおりなつる故に歌字を用ゐる文此方なくもとよりしの書籍
をつとめよく学び詩をも他ぞる故に于多に詩字を用ひてハ詩とまぎらハ
しくもあるべバ歌字を用ゐるるしらるれいひきしてなるべし　問云釋
名曰人聲曰歌歌柯也以聲吟詠有上下如草木有柯葉也といへり
此方の于多も此義なりや　答云あらずこれハ歌字の義に従ふなく

いへる説なり文字の義ハ此方の言によりつるつるものにあらず于多と
いふ言につきてこそ義理ハ詮ぞつる事なれ歌字の義についきある
義をうけて于多の義とせむ事大にいはれぬ事なりそれも于多と歌
字とを義理よくおりあひたらバ歌字の義によりて説なるバ于多
の義なりとも此のつくおりあひがたきものにあらねどこの柯也といふ説ハ
歌字の義なりとも此方の説ぞ牽強の説なれバまざしく此方の于多にハ
さらにあたらぬ事さまづくりあるまじきなりとぞ字義
ハ後なる事おほし是のむべかりあやまりして此方の言を解するに
文字の注をうつしをゆるくかるる大なる誤ありとしその言のことハ
文字の意をおりあひやいはやをも考く後に文字の義をそれぞ

べしされども言のこゝろふかきかたもあらざらバ文字ハ借物なれバ深く
いふべき事にもあらじ然るに文字の義理のことをくハしくいひなく
されども此方の言の義とせられたるハあやまれる説也　同云神武天皇紀
に為御謡之曰謡此云宇多預瀰とあり謡字も于多にあてたる
善云歌謡といひて大かた歌も謡も同じことなるべし　詩経の魏風に
中の詩に我歌且謡といふ言あり是ハ有章曲曰歌無章曲曰謡也と
ありて説文にも謡徒歌也といへりさるにていふときハかくのごとくなれども紀に
謡字をうけたる歌字と差別あるまじけれバこの旅にかの御謡といへる
于多をも是謂来目歌今楽府奏此歌者云々とあれバ正しき歌之
同云諦奇などの歌字と差別あるや　善云こゝに同しき事也

又問云なるを與年といひ詠ずるといひ又詠字を那賀牟流といふ是
らの義いかゞ　善云于多余牟といふハやゝ後の事なるべしこを敷ハ于
多布が于多の訓語なれバ根本の詞なれバまで于多布といふべしされ
故に古事記に奇を載るとて歌曰とかきたるところの文章にもつゞき
極于多比天伊波久とよむべきをおほしこれも古語なれて于多布といへる
所にそのまゝに書る物なるべし余牟といふハやゝ後の事なる尤し
なべし神武天皇紀に宇多預瀰といふ言ありなべし是ハ後よりいへる
言なるべけれバあしろに古語の言とハ定めがたけれど紀の訓ある所
古語の古語なくハなき事なるに余牟とも云べく預瀰とある瀰字ハ
下によみつゞきをいふなれバかならず瀰にハあらで体語と定むる故美

于多余美志天能多麻波久とよませたり此歌ハ枕草子なとにも
あそびしく物せたるといふ事二ツありこゝも女ちの詞なるゆゑさて
その于多余美といふもかゝるをよむといふとある人の詞なるべしされバ
余年といふもいとふるき言となりて于多布といひてたゞふハ残
吟詠なともまぎるゝこともあれバ今あらたに數九なる事をバ余年といひ
て形をさきまでるらかなくもなるべしまたて余年といふ言のもとを按ぜ
るにまづ書をよむ經をよむなどいふ類の事なれども行ハ出雜なる
かなく經の事しを定めてあらひハ歌ちもあまた説詞の合ひなも多し
わたりしことまりてある辭を今にもまねびていにいふを余年といふ
それは於を出るもくたとへば余年とてもいふぞたゞふもつゞくとま

ねびいふをならひいふ也此の世に經を誦陀羅尼を誦と同じ事なり
さて此は出雜なるにてそれになずらひて文の詞をまねびいふをも同じ
く余年といふ也さて又物の數をかぞふるをも余年といふ事古事
記上巻稲羽之素菟の故事をうけたるにて神代の事也則
漢字をうけたる也字の義にかなはずしてたゞ其のまゝにかけるなり万葉
集中も月日余美都々などかけるが多し又十巻に月日乎數而
第十一に打鳴鼓數見者などもありこれ物數をかぞふるにて今の俗語
にもいふ事也されバ定まりてある辭をそのまゝまねびていひつゞくるを
物の數をかぞふるに似たれバその意同じきゆゑそれにつきて名を付て
數九なるを余年といふも二つの義なるべし一つなるをまづ余年といふなと

後拾遺集巻二十
俳諧哥に橘季道
みちのくにゝ下りて
武隈の松をよみに
よみける二木
の松を人とはゞいかゞ

とかくいひ出かたとするてゆきひとつてよすてうたゆきうたる
増正深覚
武隈の松此二本をうきとゆいハよくしあるかハあらぬなくし此下句あると余年と数と余年とを兼ねを興ましくなる

なほいへるがごとく宴にてある調をとなへことばにつゞくとまねびいへるなりされば
其うたをも謡ふにいたしくたゞうたにつゞくとまねびいふなどは余年と
いへるなるべし古事記に此二歌者讀歌也といへる事もこれハしづかく
名の義ハ次にあるびハ夷振也宮人振也宇岐歌也などあるハミな
謡世にうたひて奏につたへそなづけたる國之讀歌之とあるハ此名ハ他の
名所にうたひて謡世とよびたまふも名なる故にかく称せし
なるべしさればしめくあるへき絵紀しけるなどもらさいだしてかくかく
にうたひ出せるものもおほくありしられたるかおほくひともおほくおのづから
絵紀にあることなども余年といへるにあたるなるべし手多布といひて
いなかをも吟詠にまがふるもありて又のなにもかしもうたひぬるにも多

うたひなハまづく名の中もなにかしにうたむものか絵紀なるらハ余年といふも
なるなれたるなるべし今一つの義ハ名ハ世にあハまと思ふなをといひつゞ
けることもとうたふかと同じことにて余年とハいふなりしかそ詩を
作る事を賦するといふに此義あり釋名云敷布其義謂之賦と
ことしなどうたひけるを余年といふを手義同じこの頃此方なく名を
六くさにわかてる中に加叙幣手多といへるを詩の六義の中に賦なぞ
なり又漢書に班固がいはく不歌而誦曰賦とこそ又余年といふは
うたなハ鄭玄が云賦者或造篇或謂古とこそ又此方なく新名を
始て絵紀なるをも古名をたゞいふにうたふものを今余年といふ今
くもあハて雄略天皇紀に詔群臣曰為朕讃蜻蛉歌賦之群臣莫

万葉第十七ニ
靡堪賦歌
又第二十ニ賦和
歌

能敢賦者とあるも今ハ賦字を余年と訓せり万葉第二十にも
賦雪歌とかけるもあまたあれバこれらハ其義の義にハあらず故ふ
うたうたひけるにあてたる賦詩といふ字にならひてかけるなるべし
右二義のうち後の義ハおのづから賦字のまゝにかなひたれど
さる事なれど上古の言の葉ハそのものをつらねいふ後世の義
まさるべきさてまづく余年といふ言ハ讀誦などの字を用ふる
なり讀字ハ大方書籍をよみて余年ことばにものする誦ハ周禮
春宮大司楽山諷誦とある註に背文曰諷以聲節之曰誦といへり
此方の余年といふ言にかなへり故に物語文などにも誦ずる字
いへる事多しなほしもさせられたるあるゝにならはせるにやハ

日本後紀第八
にも作和歌とふ
ることあり

此字さらにのなハぞあらくさに敷化ある事をよみむといふハ賦字よ
くらなつるかたよいへるなれバ日本紀中を余年と訓じたる例あれバなく
なりし縁る後世まで歌を敷化あるを余年といふ詠字を用ふ
わらへるにも此字の義ハ下に記しくいふべし又古事記よ作御歌と
いひ日本紀中も作歌などかきまた三代実録などにも作とかき万葉
などにも詩作とかけることハなりしに作詩といふにならひかく
うちたる大方漢文よかける所にこれ作とあるハ万葉も詞書ハこれ
漢文なればなりもの書きにも都久留といふべしハ字つねバ右乃
作字もこれ余年と訓ぜられるゝ神代紀に為歌之神武天皇紀に
為御謡之など為字をかけるをもみな美宇多余美と訓じたるに

うつほ物語藤原君巻に四十に右二首よむといふ事を比登都々久里天とあり

なぞらへて作字も余年といふべし都久留といふは也後の言之顕宗
天皇紀に詞人に于多都久留比登と訓じたるは作歌といふ字をもて
よみたるにて後の人此をしる訓なるべし古言にあらじ是は于多毘登と
于多余美比登と訓ずべし然らば都久留といふ言は體のある物に
いふ言也哥は聲につけて言葉のあやをなせるものなれば都久留とは云
べからず然るに此方の言と漢土の言と全く同じきもあり又か
はれるもあるなりとしるべし作字は形あるものを作るにも詩文などを
作るにもいへることなれど都久留の言は奇なれども形あるにはいはれざる
は是文字の義と言の義と分別あるなり　問云歌なるを聲に統を
るを余年といふ故をしらずしてよむを今よむとはいへど　答云まし

ゆゑといへるや又余年といふ言は何によりて定まりてある詞を今よみならび
いふすらさもいへば人の書を抄さしたるを今よみならびいふなる文余年と
いふ之枕草子に抄し出しおきしをさうしに出されたる
げその歌ちかひたるこそそのかみれる事をもよむうしとある
是をさて于多布は聲を長くしてそらくよみすらんかし余年は聲を
長くせばしくるが詞のやうにつぶくとよみをあぐるなり万葉集第
八に右二首若宮年魚麿誦之第十六に謂二此歌一又第廿に右二首
左大臣讀之主人大原今城傳讀なども あるも歌をもよみをあぐる
まし　問云誦ずるといふはいかに　答云誦字は聲を長くしてそう
とふなる事にいへる尚書の舜典に歌永言とある永字則咏

詠は通じて歌字と同じ意なる故に説文に詠歌也また歌詠也
とも註せられたれば此字を奈我牟流（ナガムル）とも于多布（ウタフ）ともよませてよく
かなへり。されど彼ながむるといふ事の意なるに後世にいたりて
余年といふに此字を用ひて歌を讀む事とするハ字義にかなはぜ
ならし。歌ハ于多布といふが根本の称呼なれバ詠字をかきて于多布
と訓ぜバあたるべし。讀むる事を用ゆべし。余年といふに此字ハあたら
ざれど中古以来おしなべて此字を余年といふに用ゐる事になれり。
いまハいふかひなくしてよろづの事にのみもちひらる。古事記に云
此歌者國主等獻二大贄一之時恒至二于今一詠之歌者也。日本紀崇神
天皇紀に乃チ重詠二先歌一などある。万葉第十六にあさか山のうたを載

たる所に詠二此歌一とあるもうたふ事なるにおほかたそれを例として
ひさしといふ事を詠とかけるは詞の本とうるはしきならバ新に義に叶
ちゝむなれども詠とかくはいかゞぞや。かくて其由を余年と訓ずる事ハ
あるくハさるにてことわりなし。又万葉第七第十に詠天詠月詠鳥詠霞など
いふ事おほし。それハうたふとよみてあるもあれど詩に詠物とて草
木禽獣そのほかなにくれの物をよみたるを詠某といふ事あるにならひてうけるなど
されどもそれハ詩のひとつのさまにしていまだよのつねのうたをいふにハあらず
よりて万葉にも詠物にのみ多くかゝる題にあらざれバ詠懐詠述
懐などいふことハあまりゝ詞をつくるにかはりて題をばかへ詠字を
用ゐる八必ずしもあらず同じ事なりながら詠歌といふハこれハ

烏詠歌といふは
古事記中巻に
あるうたを宇多

豫游須流とよむべきなり

二字なるに手多布といふことをなくなりて新作なることの根本の義なかりき
つまさるるも後世になりてわしくなりて詠歌二字をさへよむといふ義
となりしハたゞつゞくところまでも詠歌なるといひて二字ともにいふこと
なる事之様に歌擬なるもいへき　同云奈我年流(ナガムル)と宇多布(ウタフ)と差別
あるや　蓋云たとへ用じ事なれどさりしくなりていはゞ奈我年流と八
聲をながくひくといふを言べくいふ之手多布とハ聲をながむる言の本
またはらく調ひあやなるをいふなれバあげく聲を長く引ていふハ
ことを奈我年流之意にあやをなすべきほどなくながむるが手多布之
故に手多布とも通じて奈我年流といふところは異なし奈我年流を
あぐく手多布といひながらさ事多しかくて文字も詠字ハ奈我年

流なりと手多布なりも用ひ歌字ハ手多布にのミ用て奈我年流なりと
用ひざるところとしなくもひろくところなく歌字と詠字と用ひざるに
差別あるなき根深よくりくいふべし　同云奈我年流とハ物を比
して長げく事又物をつくづくと見るすなることをおもひいへ聲を長く
ひく事とハいはず　蓋云まづて一つ詞の様なハさぬくにまことのかりてなら
らぬ事なりと雖じ用る事多し奈我年流の言も意字にて様なるに
さぬくのミに雖ならんとまうしとありくいうもまづ奈我年流ハ長く
なる義之廣くなるを比呂年流(ヒロムル)といひ加多久須流(カタクスル)を加多年流といふ
格之されバ奈我年流ハ物を長くなる事之住吉物語に人なるらバ
となづきねをあどうちながめくらく又ゆうめづるを人もあらさの後のえ

夫木集十三建長八年百首哥合 信實朝臣
月のゝ此ほども わきて寝ぬれバ
てんと花ちる
ありける

まくれまつ風のをとに吹むとうちなげきむすぼゝれけバかく枕の葉
なみをもながやうにうちなげきて云く独寝に老くらす人よりまて几帳
のまへなる人によそへらるゝをなげきとよまれけるとさためくあれバなげき
こぞなげき忍ハかなきまろハさらにいくとうらひぬきもバなきなげく
いつるハ中ごろにありてとも猶まさるて人の言のとかもあらぬ蜻蛉日記
にハさしきあれたる家のつくりいとうらもさき物にあるうになぐさめ
なきことなりと簾の外をもやりて見るに物をなげくものうちさせて
又物思ひしてなげくこともと奈我年流といへることともあまと物語などにも
おほしこれハ奈宜久(ナゲク)といふ言と同じ事也さて奈宜幾(ナゲキ)ハ長息(ナガイキ)といふ
事也さて奈宜久ともいへるはらしてなかいへる息と生と同じ言也生

と死とハ一つの息にかゝりたる物なれバ息をせねバ死ぬるなれバ生
生(イク)ハ息するといふ意にて本ハ息と生と同じ言なれバ息も以久ともいへるさ
らく言也されバ息をながくするを奈我以久(ナガイク)といひそれをつゞめて奈(ナ)
宜久(ゲク)ともいふなれバ奈宜久ハながいきするといふ事也万葉集に長氣(ナカキケニ)
所念鴨(オモホユルカモ)などよめる事数ありさて何故に息をながくするぞと
いふに物に感ずる事深く思ふ事あれバ必ながき息をつく物也
それを多賣伊幾都久(タメイキツク)といふ漢文なども長大息などいへるそのながく
息をつくによりてむすぼゝれたる心のはるゝ故に深く感ずる時
あれバおのづからながき息ハせらるゝ也万葉集八に波のうへゆ見ゆる小嶋乃
雲がくれあな氣衝之(イキツカシ)あひわかれなバとよめる氣衝之ハ即なげ

万葉第二
夜者霧氣衝明之嘆友云々
又第十三
吾嘆八尺之嘆
彦麿云万十四
つくはねのねろに
かすみゐすぎかて
いきづく君をゐ
ねてやらさね
沖になもそろも
のもころやさかり
あるいきづく妹を
あそてきぬかも
あちのすむすさ
さの入江の隠
沼のあないきづ
かしきひさしほて

かしといふもむかしといふなげき、いきづきなどいふも多くあることなる
をもて奈宜久ハ長息なることいふ事をしるべし　されバ息をながくする
事なるをバ奈宜久といひて奈我牟流といふことさてそれに深く感(アハレ)となる事
あれバ必長息をするなるゆゑにことさらに物して物に感ずる事を
やがて奈宜久とも奈我牟流ともいふ故ここの故に奈宜久といふ詞ハもと
て情の感ずる事なるをもてしきりにおもしろきをとるのいさを
もとよりいふ言を継るに後なるをもていふくものきゝてにのそいふなり
深く感ずる情の一つをとりてていふ奈我牟流いまさして
奈宜久にハ歎字をかく字書に歎吟也とも大息也とも註したるに
歎息といふかたの奈宜久によくかなへり又称歎とも歎美ともつゞけ

いひてし字の義もかなへりそのことはりハなげきぬるさて右のやうに情
深くあはれと思ふ事ある時ハ必長息をつくなれば則奈宜久之奈
我牟流之を附て息のことにもあらずかくもながむるおなじ
阿那(アナ)阿夜(アヤ)阿々(アヽ)阿波礼(アハレ)などいふ言ハみなかの長息とともに出る言にて
其情感の深さになげきひておのづからそのこゑ長く出る物之れ又刊
奈我牟流(ナガムル)之深氏漂澪巻になるもとなげやうにひとりごちをる
ある是あはれといふ詞をなげくといふ今の世のなるにあはれと
なげきあまりとなる是長息となる阿波礼(アハレ)といふ詞のとにぞ
されハ長息をつきあはれとなげくも物あるゆゑに其ハ情
感ずるさまをうち長めくいひつくぬるを詞の程よくとゝのひたく

古事記景行天皇段に長眼とよめるを宜考

あやなる是を于多布とも于多ともいふ也（ひとしくいへり）　詩序に情動ニ於中ニ而形ニ於言ニ言之不足故嗟歎（ナカイキス）之嗟歎之不足故永歌（ウタフ）之といへるこゝろにも同じこゝろぞかし　されば息をながくひくをも阿波礼などいふ言をながくいふも于多布もこと通じて奈我牟流といふ言も歌の物のあはれにたへぬ時のなげきなればながきいきの深きをさしてやがてそれをも奈我牟流といふはまへにいへるがごとし　同云物をつくづくとみるをも奈我牟流といふもいふなる故ぞ　蓋云奈我牟流は目を据ゑてながく見る事なくそれより轉じて物思ふ事をもいふ言なるのまへにふりしくといへるがごとし　三代集の頃までは物語文などにも多くは此の二つの意にのみ用ひたる事にいへるは、まれに終るを

六帖
ながめつゝ月をもめでむ…

彦麿云千載集に…

く奈我牟流は今のこゝろにてもしらるゝ物思ひを見るなるよりのこといへるは又まつことを一つに合せる物をも又つまくなく二つの今物をも一つにいはまづ物思ふ時はなかなかもとのる物思ひにて物はんのとみなくなどとみじきをまでに鹿本事をも同のつまにつくづくとみえて物なきべうの物思ふと奈我牟流といふかしこくをおもひつくづくと物をとるるとも　やがて奈我牟流といへるより深かりては必しもおもひのみねどもたゞ物を深くしてるをも考ふるはまをなれるなるべし　されば中比は物思ふをとこる事ともとゝりてよる也ぞに更にあるがなりのも詞中にも多くしこれ物思ふ時は必物をつくづくとみる物なり　蜻蛉日記によろづをながめおもふに又とある事をつきせずながむる程になどいへるもまさしく

新勅撰集戀五
道信朝臣
物思ふ事はいふなるすべてはゆくゑねもあかめてのこそあらしつらむこれこそあかむるもしらにそうまことあり

ながくといふに同じく物思ふ事也又同日記に
うひたく年ごとになげむれどはかなき花の色にぞそめ
源氏須磨巻に
山のはをいつるまで月をながめむねやの板まもまばらなりけりと
これなどはみなながむることにもあるべしといひさびしき今一つ書て
三代集の頃より世の物思ひをながむる事を奈我牟流といひつるが
あまたの事の中にも殊にそのながめしきかはりたるを撰て物を
よみけるさまぞとかく物思ふ事をよみける事になりたるなれば
うち物思ふにもながめるとよめる事とむかしのことを今も物にする
ひろき義をながめるは詠る事の義にまさるべしとぞまれかく

また物思ふより轉ぜしはさながらいひて奈我牟流といふ事に
眺字をつくるはこの字ハ視也望也と注しあればものを見るに
いふところの言の意をうかゞひて奈我牟流の中に詠字よくあたる
まりたがひぬるのよみにつけるを奈我牟流とよめるに詠字を
かくハ文字ハ假物といひならぬ同じく書てあるべきものなり

石上私淑言上巻終

下總香取郡高萩里
石橋傳藏可假